

新学習指導要領における国語科「探究型の学習」のあり方

杉 山 浩 之*

A Study on “Inquiry-based Studies” of Japanese Language in New Course of Studies (2010)

Hiroyuki SUGIYAMA*

はじめに

平成20年中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)がとりまとめられ、同年3月には、文部科学省から新しい幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領等が公示された。本研究では、学習指導要領改訂に関わって、その背景や改訂の基本方針等について説明していくとともに、今後求められている指導のあり方の一つの提案として「探究型の学習」について考察する。

1 新学習指導要領の基本理念と改訂の基本的な考え方

教育基本法の改正等や現在の子どもたちの課題を踏まえ、「生きる力の育成」という学習指導要領の理念を実現するための「基本的な考え方」が、以下のように示されている。

「学習指導要領改訂の基本的な考え方」

- (1) 改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂
- (2) 「生きる力」という理念の共有
- (3) 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- (4) 思考力・判断力・表現力等の育成
- (5) 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- (6) 学習意欲の向上や学習習慣の確立

- (7) 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実
(中央教育審議会答申、2008)

今回の改訂では、教育基本法等で示された教育の基本理念を踏まえるとともに、現在の子どもたちの課題への対応の視点から、上記の(2)から(7)をポイントとし、中でも特に「(3) 基礎的・基本的な知識・技能の習得」を基盤とした「(4) 思考力・判断力・表現力等の育成」、「(6) 学習意欲の向上や学習習慣の確立」及び「(7) 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」が重要であると記されている。

2 学習指導要領改訂の基本方針

今回の改訂は、教育基本法や学校教育法等の規定にのっとり、前述の中央教育審議会答申を踏まえ、次の方針に基づき行われている。(「小学校学習指導要領解説総則編」より抜粋)

- ① 教育基本法改正等で明確となった教育の理念を踏まえ「生きる力」を育成すること。
生きる力という理念は、知識基盤社会の時代においてますます重要となっていることから、これを継承し、生きる力を支える確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた育成を重視している。
- ② 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること。
確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくむ

* 本学教授

ことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要がある。

③ 道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成すること。

豊かな心や健やかな体を育成することについては、家庭や地域の実態（教育力の低下）を踏まえ、学校における道徳教育や体育などの充実を重視している。

特に②については、従来の各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視することに加え、観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実することに力点が置かれている。そして、さらに総合的な学習の時間を中心として行われる、教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ることとし、「習得」「活用」「探究」の一連の学習を通して、思考力・判断力・表現力等を育成することに重点が置かれている。

3 「知識基盤社会を生きる力」と「探究型の学習」

ところで、「知識基盤社会」の到来を受け、学校教育における新しい「学力観」の進化の必要性から新たな学習指導要領が要請されていると言われている。「知識基盤社会」においては、「知識のグローバル化」「知識の日進月歩」「知識パラダイムの転換」「老若男女を問わない社会参画」が特徴とされ、この社会を「生きる力」が学校教育に期待されているのである。この生きる力は、OECD の PISA 調査の能力（学力）観である「キーコンピテンシー」と大いに関係している。それは「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力」であり、「社

会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力」「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」「自立的に行動する能力」の三つに分けられる。

PISA 調査では実際に「読解・科学的・数学的リテラシー」及び「問題解決能力」が測定される。それぞれは、以下のように説明されている。

- ・ 「読解リテラシー」は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」である。
- ・ 「科学的リテラシー」は「自然界および人間の活動によって起こる自然界の変化について理解し、意思決定するために、科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す能力」である。
- ・ 「数学的リテラシー」は「数学が世界で果たす役割を見つけ、理解し、現在および将来の個人の生活、職業生活、友人や家族や親族との社会生活、建設的で関心を持った思慮深い市民としての生活において確実な数学的根拠に基づき判断を行ない、数学に携わる能力」である。
- ・ 「問題解決能力」は「問題解決の道筋が瞬時には明白でなく、応用可能と思われるリテラシー領域あるいはカリキュラム領域が数学、科学、または読解のうちの単一の領域だけでは存在していない、現実の領域横断的な状況に直面した場合に、認知プロセスを用いて、問題に対処し、解決することができる能力」である。

これらのリテラシー（学力）を身につけるためには、基礎・基本の習得に加えて、それらを活用して問題を解決し、さらに「問題を深く追究する」という探究型の学習が求められる。問題を深く追究するとは、「テキストからフィールドへと目を向け、現実の自然や社会の状況を捉え、切実な問題意識を持ち、自ら設定した課題を考えていく学習」である。正に、本来の総合（的な）学習が求めている学習である。学習指導要領（小学校）「総合的な学習の時間」の目標は「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体

的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」ということである。また、内容の取り扱い(2)では、「社会体験、ものづくり、生産活動、発表・討論などの学習活動」「地域の人々の協力」「地域の教材や学習環境の活用」などが配慮事項として挙げられている。

しかし、「習得した知識・技能を活用する学習」と、「活用を積み重ねていく探究型の学習」とは質的にかなり異なる学習である。前者は教科の中で十分に出来るが、後者を週数時間の「総合」任せでは「知識基盤社会を生きる力」の育成は十分とはいえないであろう。当然、教科を含むあらゆる学習活動の中で、この探究型の学習が実現されなければ、新しい教育理念は絵に描いた餅に終わってしまうのではないだろうか。この問題を追究するために、実践例を以下に示し、今後求められる「探究型の学習」のあり方を考察していきたい。

4 「探究型学習」の授業記録

(1) 小学校「国語科3年 盲導犬」(作者の説明文の書き方を批評して話し合う授業)

話し合い③「筆者の表現方法を再解釈することを通して、表現意図に迫ることができる」(T:授業者)

T はい、昨日で自問自答が終わりました。これまで自問自答で考えて来たことを、しっかり出し合って、みんなで吉原さんの書いた「盲導犬の訓練」について考えを深めていきたいと思います。そして、次の時間はまとめを書くのですが、まとめを書く前にもうちょっと考えてみるのが、この話し合いの中で見つかることも大切だと思います。ではプリントを配ります。

T 今日は、(S)さんのまとめをもとに考えていきます。これまでも言ったように、こうして紹介する考えにはすばらしい意味があります。それを支え、伸

ばしていくような話し合いにしていきたいと思います。自分の自問自答で考えたことをもとに、つなぎ合っていきたいと思います。じゃあ、読みます。

(読む)「盲導犬は、人の目になって、人を安全に導くことをするというのは、この学習をする前から知っていました。でも、こんな訓練をするとは知りませんでした。みんなの中で「ほめられるなどの友情話を書いてない」という人もいましたが、吉原さんは、そういう話なしで、訓練をすごく表現できているから、納得できました。(中略)

N 吉原さんは、訓練をすごく表現できているからと書いてありますよね。書いていないことがあったら、すごく表現できていると言えないんじゃないですか。

S でも、友情話なしで訓練のことを書いていて、それで十分だと私は思います。

N これで十分だと言ったけど、全然十分ではないと思います。

T Nくんの話から、つながっていかうか。

M ほめられて、それで初めて頑張ろうとして、次もまたほめられて、それでずっとその繰り返しをやっていて、たまには失敗することもあるけど、それを、ほめられて次をがんばろうと思って、だから、ほめられることは入れたほうがいいと思います。

F 4段落に、一歳になると、盲導犬になるための厳しい訓練が始まるのですって、厳しい訓練って書いてあるから、ほめられる話は書いてないほうがいいと思います。

SK 私は、Mくんに意見なんですけど、その辛いって、52ページの7行目の最後を見て下さい。辛いって書いてあるじゃないですか。辛いけどがんばって盲導犬は訓練をしているから、そういうので、ほめられるという話が、私は入っているんじゃないかと思うのですが、Mくんはどうですか。

M んー。(子どもたち:「バトン回したら?」)

N ほめられているということと、辛いってということは、関係があるんですか。

SK そうやって、辛いと思っても、盲導犬も間違ってたって分かるし、良かったらほめられるから、辛いこともあるけど、頑張れるんじゃないですか?

S ほめられるっていうのは、私も入れたほうがいいと思うけど、吉原さんが書いた文章は、訓練を紹介する話だと思います。その訓練を書いた話に、ほめられ話を書いたら、変だと思います。だって、例えば、12段落の「自動車にぶつかりそうになるという訓練をします」の次に、そこを変えて、「出来ました。それで訓練士さんは、うんとほめました。このような訓練を繰り返して危ない時は、ゴーと言われても前へ進まないことを覚えるのです」だったら、ちょっと変と思います。でも、お話で、「この訓練はちょっと難しいです。頑張れと訓練士さんが言っ

ています。そして、出来ました。」だったら、おかしくない。だから、この話は訓練の紹介の話で、それで、お話だったら、ふつう、別にそういうのは書いてもいいと思います。

T 具体的に言ってくれましたね。文章に当てはめるとそんな感じがする？

D なんか、自分に質問っていうか、吉原さんは何で書かないのって思ったんだけど、題名が盲導犬の訓練だから、訓練を主に書いているから、ほめられる話はなくてもいいかなと思いました。

A 私は、最初、Dさんがさっき言ったように思っていて、さっき変えたんだけど、また、前のほうがいいかなと思って、(T:という?)だから、Sさんは、ほめられること入れたら変にならないかと言いましたよね。だから、さっき聴いていて、なんか変になってたから、やっぱり入れないほうがいいかなと思いました。

B Sさんが言ったように、ほめられたこと入れたらおかしくなるし、題も、Dさんが言ったように「盲導犬の訓練」なんだから、盲導犬が辛い訓練をしているんだよって、伝えたいんだと思います。)

SK 私も、最初は、SさんやDさん、Aさんと同じように、ちょっとSさんの文には、ほめられることも入れたほうが良いと思っていましたよ。でも、さっき、Sさんが例えで、入れたら変って言うたじゃないですか。それで確かに変になってて、入れてもいいんだけど、Bくんが言ったように、入れなくても、この文章は、題名が「盲導犬の訓練」だから、この文章は完成すると思うから、入れなくていいと思います。

D Sさんが言ったように、どこに入れるかも、筆者の吉原さんも迷うと思うし、それに、入れなくてもいいと思うから、それに、盲導犬の訓練だから、ほめることは入れなくてもいいと思います。Nくん質問なんだけど、ほめる話をどこに入れたらいいと思うんですか？

N ぼくは、そういう入れるんじゃないくて、作文の言い方を変えたいと思います。

D ちょっと、どういうことか意味がわからないんですけど。

N だから、この作文にほめられる話を入れたら、おかしくなるけど、この作文の言い方を変えれば、例えば、盲導犬…作文を入れれば良いと思うことをちょっと改造すればおかしくないと思うから。

D 題名を盲導犬のほめ方とか、そういうのにすればいいんですか。

N でも、訓練でも、ほめるんだから、訓練の中にほめられることも入っているんだから、別にちょっとだけ、入れようとするところに言い方を改造して、ほめられることを入れれば良いと思います。盲導犬

の訓練でほめるんだから、盲導犬の訓練でほめ方、ほめることを書いたほうが良いと思います。

T はい、「盲導犬の訓練 N〇〇」なら、ほめる話とかを入れて訓練の話が書けるけど、「盲導犬の訓練 Y」なら、ほめる話を入れるのは、どうも入れにくいんじゃないかという、変だということですね。

U 吉原さんの文章には、ほめる話を入れないのには意味があるけえ、その意味は、吉原さんの文章を読んでいたら、何となく分かってくるような気がする。

T 今、Uくんは、吉原さんがほめる話を書かないことには、何か意味があると言いましたが、どう思う？ 何だろうね。吉原さんは、何を考えてほしくて、こういう書き方をしているんだろうね。

M これ、国語の文で、説明文みたいな感じだし、後ろにある本とは違って、国語の本だから、勉強に関係あることが書いてあると思う。

T 勉強になることですか。勉強はだれがするの？ (C ぼくたち、わたしたち) 自分たちにとって、勉強になる、意味のあることを吉原さんは、教科書に書いているんだね。小学3年生であるあなたたちに、何を考えてほしいんやろうか。それでこういう書き方をしとるんやろうか？

G ぼくは、吉原さんはたぶん、わざと書いています。なぜなら、もし嬉しいとか書いていたら、こんな風に問題とかにならなかったと思うし、違う題名になっていたと思う。吉原さんは、ぼくたち、わたしたちに、考えて嬉しいとかを考えてもらってほしいから、わざと書かなくて、こういう授業にして考えてもらいたいから、したんじゃないかと思う。

T はい、あつという間に話し始めて45分が過ぎてしまいましたけど、一生懸命話し合ってくれたので、先生も、うんと考えさせられました。その中で、先生が心に残ったのは、吉原さんが書いている言葉、厳しいとか辛いとか、それから題名とかとつないで、吉原さんがこの書き方に込めている意味を探ろうとしたことです。やっぱり、文章に書いてあることから考えることが、大事なことだと思いました。最後に、Sさんに戻るんだけど、話し合ってみて、今どういうことを考えてますか。

S 話し合ってみて、ほめられる話を入れたほうがいいのか悪いのか考えていて、入れたほうがいいのか少なくなったけど、最終的にどうなのか、考えてみたいです。

T ありがとう。おわりましょう。

5 実践の分析と批評

本実践に関する授業資料(文末に本単元の指導の流れも参照のこと、注1)を基にし、授業

者の工夫、授業記録の分析、批評の順で以下に述べる。

(1) 授業者の工夫

- 1) 指導計画の第1次では、前半から全体を読んだ感想を交流する時間を作り、いろんな解釈や感想が出ることで、さらに題材への興味を高めていった。
- 2) 次に、いろんな立場からインタビューを構想することで当事者意識を育て、よりリアルな理解を深めていった。
- 3) こうして題材の理解が進み、盲導犬の気持ちに分かってきたところで、感想の交流を持ち、さらに理解を深め、問題意識を育てていった。
- 4) 再び、全体での学びあいにより共通理解を進めてから、自問自答の一人学習でさらに問題解決を進めていった。
- 5) こうして一人一人の問題意識を高めたところで、実際に盲導犬と出会う場を設定し、テキストから想像していたことを確かめたり、読めなかったことを知る場を設定した。
- 6) もう一つの題材として「クイールは、もうどう犬になった」(こわせ たまみ)の読み聞かせを行い、図書館の資料へも誘っていき、盲導犬についての知識を広げていった。
- 7) 話し合いと自問自答の一人学びをテーマを持って行った。

- ・盲導犬の気持ち
- ・筆者の書き方を批判的(客観的の意味)にとらえる
- ・筆者の表現方法の意図をとらえる(本時の授業記録)

以上のような教師の工夫(子どもが生きる教師の働き)が、次の学びあい(授業)の様子に現れているのではないかな。もちろん、子どもが

生きるのは教師の働きだけによるのではない。子どもは自分の力で生き、クラスの仲間という刺激を受けて、生きているのである。教師の働きが子どもの学びを阻害することも大いにあるということを私はいつも考えている。

(2) 授業記録の分析

- 1) 一文節 T 1 (1)～T 7 (24) Sさんの「まとめ」(盲導犬は人の目になって人を安全に導くことは前から知っていたが厳しい訓練については知らなかった。訓練の仕方がよく表現されているので、「ほめられるなどの友情話が書いていないという考えには賛成していない」)の紹介。

それに続く意見の交流。主にSさんの考えへのお尋ねが続いた。Sさんの考え方を理解しようとお尋ねは鋭いもので、一見すると反対の立場からの追及のような感じを受ける。しかし、そのことによってSさんの考えはさらに確固としたものへとになっていった。そして、授業者はT 7で「Sさんのこうしたしっかりした考えを支え、伸ばしていきたいと思います。今までの話を聞いて、どう思いましたか。書いてみましょう」と全体へとつなげていった。

Sさんの考えは、筋がはっきりとしたもので多くの子どもたちの考えに否定的な意見を表明しており、一石を投じて活発な議論が起ることを予想させるもので、授業者の子ども理解が良くできていると感心させられる。

- 2) (書き終わって) N 2 (26)～K 1 (40) デベイトのような話し合い。

「盲導犬が褒められる話を入れたほうがいい」という考えが、N 2、D 1、M 1、B 1と4人から続いて出る。理由は、「ほめられて、次を頑張ろうとするから」と、子どもたちは

自分たちの経験から想像している。その後、F 1が「厳しい訓練と書いてあるのだから書かないほうがいい」と対立的に出る。しかし、再びR 1が「ほめられると書けば盲導犬の気持ち深く考えられる」と「入れたほうがいい」と述べる。

T 9はR君の考えを取り上げ、「なんで書かないのですかね。謎が出されました」とつながっていく。

Z 1は「訓練は辛いけど、ほめられれば辛さが吹き飛び、嬉しいから、書いたほうがいい」と述べる。F 2、D 3、F、D 4とやりとりした後、R 2は「訓練とほめられることと混ぜ合わせて書けばいい」と統合案を出す。続いてK 1は「Fさんと考えが一緒だったけど、今日の話から、書いたほうがいい」と考えが変わったことを述べる。授業者は控えめで、子どもたちの考えをつなぐ役割に徹しており、それに応えることもたちの発言力がすばらしい。統合案は拮抗場面を突破する創造的な動きである。考える力が育っている証である。

3)「盲導犬はほめられている」という内容が隠されていると考えが出る。

T 2 (41)～R 3 (61) B 2は「文には書いてないかもしれませんが、意味的には書いてあると思います。14段落の最後を見て下さい。さらに他の犬が吠えても気にしないことが必要ですと書いてあります。気にしないようにすればほめられるから、ほめられる意味も書いている」と述べる。

私の解釈では、これは褒められているとは読めないが、B君は褒められていると想像している。

次のZ 2も「B君が言ったように、文の中に隠れている」と述べる。続けてB 3は「11

段落にもある。繰り返し繰り返し教え込まれます。これも成功したらほめられるから」と述べる。

前と同じ理由であるが、疑問が残る発言である。この点を授業者は見過ごしているように感じるがどうだろうか。それとも、子どもを信頼して様子をうかがっているのかもしれない。分科会では焦点にできなかったのが残念である。B君の考えはやはり対立状況を解決しようとする考えである。

次のN 3は、反対の立場から「意味があったとしても、ちゃんと書いたほうがいい」と述べる。上の発言のわからなさ、この発言が引き出されたのではないだろうか。

T 12「どうして書いたほうがいいの」に対して、N 4は「読む人もすぐわかるし、いくら読んでもどっかわからない」と述べる。話し合いが空転することなく、地に足着いたものであることがわかる。F 4もこの点を突いた発言をするが、その後の話し合いは、平行線のままである。

再び、膠着状態に陥ったともいえるが、このクラスは常に場面を切り開く考えが出てくる。3年生の子どもたちであるが、子どもたちが支えあい、考えあい、問題を切り抜けていく解決・想像力に脱帽する。それは、上で述べたような前半の指導、そして日常の学級経営が生きているのだと思う。

4) S 10(62)～N 11(79) 理性的で沈着冷静なS 10が「ほめられる文章を私も入れたほうがいいと思うけど、吉原さんが書いた文章は、訓練を紹介する話だから、ほめられ話を書いたらヘンだと思う」と述べる。さらに、訓練の文章にほめることをつけようとすればと仮定の話を出して「この訓練はちょっと難しいんです。がんばれと訓練士さんが言っていま

す。そして出来ました。だったらおかしくない」と、もし入れるなら、こうすればいいと文章を書き直す案まで考えていくのである。

これに触発されたD5は「自分に質問で言うか」と述べて、それまでと考えが変わったことを述べる。「吉原さんはなぜ書かないのかと思ったんだけど、題名が盲導犬の訓練だから、訓練を中心に書いているから、ほめられる話はなくてもいいのかなと思いました」と、「入れたほうがいい」から考えが深まっていくのである。

この発言に影響を受けたK2、Z3、J1からは、「入れなくていい」という考えに変わっていく発言が出される。この後、「入れたほうがいい」という考えは出なくなる。Sさんの書き方を変えれば入れることができるという考えが出るが、DとNの二人のやりとり（バトル）は、話を深めるほどではなかった。

5) T14～T19（おわり）

作者は「ほめていないが意味として書いている」という考えは、子どもたちの感覚の鋭さであろう。本文には、「目の見えない人の生活を支える大切な仕事をしている」盲導犬という紹介の仕方がある。このような言葉に授業で気づく発言は出なかった。

この授業は国語の授業だから、それでは授業として不十分であるという評価を下すのかどうか、見方の分かれるところであろう。しかし、子どもたちの学びあい、その一歩手前まで来ている。次の時間には誰かが気づくであろう。大問題ではないのではないか。「国語科の指導だから学習指導要領のねらいを外すことなく基礎を押さえる必要があるのではないか」という考えに対しては、子どもたちに「国語（正しくは日本語か？）の型に嵌めて制限時間内に大人が用意している答えを見

つける学力」を育てようとするのか、それとも日本語で「お互いの考えを聴きあい、一歩一歩前進していく力」を育てるのかを見極めないといけない。

(3) 批評

本作品は、人間からの見方で書かれた盲導犬の物語である。子どもたちの感性で、盲導犬の立場から物語を創作したらどうなるだろうか。現代は、そうした考えが必要とされているのではないだろうか。たしかに、盲人の役に立つ盲導犬になるためには「厳しい」訓練があるのだろうが、盲導犬にとって、訓練が本当につらいのかは、盲導犬に聞かないと分からないのかもしれない。ほめられる場面がないのは、盲導犬に不公平ではないかという感性は、今の子どもらしいものであろうが、人権感覚や平和意識というものを無意識のうちに今の子どもたちは敏感に持っているのかもしれない。我々はそうした子どもたちの感性をつぶすことなく、子どもの可能性を伸ばしていく学校教育を保障したいものである。

6 結論

以上、授業記録を中心に本実践を分析批評した。ここから本実践の成果をまとめる。

- 1) 小学生で粘り強い話し合いができ、思考力・判断力・表現力の育成が、授業記録を起こすことによってはっきりと見えてくること。
- 2) 単元構成の組み方の工夫で、教材の基礎的な理解（習得）から、教材を広げた活用型の学び、自問自答や話し合いという問題解決学習を繰り返して探究型の学習へと発展するプロセスが実現できること。
- 3) 国語の「探究型」学習で、総合的な学習のねらいである「課題を見付け、自ら学び、自

ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考える」子どもを育てることができること。

- 4) 「理解・利用・熟考」という読解リテラシー（PISA）を育成できること。
- 5) キーコンピテンシー（PISA）の人間関係形成能力を育成する可能性があること。
- 6) 本授業の成果として、次の提言が可能である。

提言1 批判的理解（判断力）の育成

- (1) 副教材との比較の視点によって、批判的な理解という学習が促進され、判断力の育成が図られるということ。
- (2) この学習に続く、学習者同士の対話が、ゆさぶりを生み、更なる学習意欲を喚起し、周囲の異なる考え方との出会いから自分の考え方と比較し、自己の客観視とさらなる判断力の育成を促進するということ。

提言2 発展的な学習における習得・活用・探究

- (1) 探究の第一歩として、主体的に設定した課題解決の自問自答（一人学習）が有効であるということ。
- (2) 習得の際には、体験学習（盲導犬とユーザー）を行うことで、その後の学習活動が活発になるということ。
- (3) 活用では、関連書から視野を広げること重要であるということ。
- (4) 探究の最終段階として、①交流（話し合い） ②一人学習 ③交流 ④一人学習 ⑤交流 ⑥振り返りといった一連の学習の

流れが発展的な学習のあり方として有効であるということ。

注

- 1) 授業資料から、この授業の単元名は、「吉原さんが書いた「もうどう犬の訓練」（吉原順平作）について考えよう（3年国語）」であり、「目標（めあて）」は、1 盲導犬の訓練の様子を正しく読み、盲導犬に対する筆者の見方・考え方・述べ方について、自分の考えを持つことができるようにする。2 一人学びや話し合いの中で、言葉にこだわりながら「盲導犬の訓練」の筆者の説明に対する自分の読みを創り出すことの楽しさを味わうことができるようにする。」となっている。

次に、授業者の願いは、「1 盲導犬の訓練について、吉原さんの説明文を読むことだけでなく、より広く学ぶために、実際の盲導犬や他の本にも触れる場も設定する。こうして盲導犬の訓練に対する理解を進める意欲を高め、「一人学習」の場を設定していく。2 やがて、盲導犬の訓練には筆者の説明以外にも大切なことがあることに気付き、筆者の説明への疑問を感じることに繋がる。再度筆者の説明を読み返し、筆者の説明の仕方について考えていく。これを繰り返して、徐々に筆者を意識し、筆者との対話をしながら、深めた読みを表現していく。3 また、こうした過程の中で、友達の読みに触れることによって、自分の取り組みが揺さぶられ、筆者の説明や他の本を読み返してみる意欲へとつながる。4 本単元でもとめる「心豊かにたくましく」とは、このような「友だちの読みに触れること」を契機として、「読みを表現し続けていく姿」のことである。」

指導過程（13時間、第一次、基礎的な学習）は、「1 題名に出会い想像を広げる。段落ごとに読み進め、「犬の特徴」や「訓練の様子」への想像をふくらませ、全文を読んだの感を交流する。2 訓練の種類分けを行い、訓練の意味の違いに気づくとともに、文章全体の構造に気づく。3 いろんな立場からのインタビューをつくり、盲導犬の気持ちについて考えていく。4 再び、感想を交流し、各自で、さらに考えてみたい課題を見つける。」以上のである。

次に、指導過程（13時間、第二次、発展的な学習）として、「1 自問自答式で課題に取り組む。2 実際に盲導犬に出会い、ユーザーから話を聞くことで、盲導犬の必要性を実感する。3 盲導犬の本「クイールは盲導犬になった」（こわせたまみ）の読み聞かせをきっかけに、関連書に触れ、見方が広がる。4 話し合い① 友だちの自問自答の様子

を聴き、盲導犬の気持ちについて新たな見方が広げ
る。5 一人学習① 話し合いで考えたことをヒント
にして自問自答する。6 話し合い② 友だち
の自問自答の様子を聴き、筆者の書き方に疑問を
持って読み返し、良さや問題点を考える。7 一人
学習② 話し合いで考えたことをヒントにして自問
自答する。8 話し合い③ 友だちの自問自答の様
子を聴き、筆者の表現方法の意図について考える。
9 自分の取り組みを振り返る。」以上のような。

2) 担任の資料をもとに抽出児K君のことを私なりに
追ってみた。

「パワーアップ帳」から、子どもたちはどんな
「パワー」をイメージしているのだろうか。パワー
という最近の功利主義的な風潮を表しているよう
だが、そこにひとつの落とし穴があるかもしれない
と危惧を持つ。学力主義も同じ発想である。しかし、
言葉にとらわれるよりも子どもたちの心をとらえる
ことのほうが大切であるから次に進もう。もう一つ
心配を述べると、日記という課題は、子どもたちに
どんな影響を与えているだろうかということである。
書くことが好きになる子もいるのだろうか、同時に
嫌いになる子もいるのではないかな。これも杞憂かも
しれない。しかし、書く力は読むことによって身に
つくのが基本だと思うが、子どもたちはどの程度、
本を読んでいるのだろうか。早くから焦って書く力
を身につけさせるよりも、物語ってなんて面白いん
だと本好きな子どもを育てる教育を実現したい。主
題が逸れたので元に戻そう。

K君の家はいわゆる批判的にとらえられる「教育
家族」のようである。母親は、「宿題をダラダラ
やっている」「宿題をなかなかやらない。何かおか
しいんじゃないか」と心配している。日記を父親が
必ず点検し、合格が出たら清書して学校に提出して
いるのである。「学力は全国的に見てどれくらいか」

と3年生の親である。

K君は、積極的な行動力があり、生きものを世話
し、学習場面では友だちの考えを取り込んで自分を
発展させようとしている。物語や工作では想像的な
力を発揮している。

ところが、一点だけ気になるところがある。文末
になると声が小さくなるということである。竹内敏
晴氏の著書「教師のための からだとことば 考」
(ちくま学芸文庫、2002年)の中で、こういう子は
得てして「自信がなく、人を恐れている」子の一
人である。親の期待に一生けん命に応えようとして
いる姿があるのではないかな。

「速く上手に文章を書きたい」と書いているが親
の言葉を受けての言葉であろう。「文章を書くのが
苦手です」と3年生の子どもに劣等感を持たせてい
る親がいる。それが将来どう影響するかはわからな
いが、「本を読んでいろんな文章の書き方を覚えて
上手に書ける」とも書いている。失敗を恐れ、形
がきれいで、うまくやりたいと言う。こうした型に
嵌める育て方をしていると豊かな感性が伸びない
のではないかな。また、学びの楽しさから離れて他
者からの評価を気にした結果、いつか息切れが起
こるのではないかな。無事に進学できても学びの
向こうにあるものが見えないのではないかな。いろ
いろと心配事は尽きない。(終わり)

引用文献・参考文献

- 中央教育審議会(2008)、「幼稚園、小学校、中学校、
高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善
について(答申)」、文部科学省。
文部科学省(2008)、「小学校学習指導要領解説 総則
編」、東洋館出版社。
授業記録は、学習研究連盟2009夏季奈良集会で報告さ
れたものを一部省略している。